

## 手賀沼通信(第336号)

Eメール：nittay@jcom.home.ne.jp  
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/  
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

2026年2月7日、弟の新田慎二（ペンネーム 新田自然）が亡くなりました。

肝臓がんと長期間戦いながらついに力が尽きました。87歳、4月21日が誕生日なので、米寿までは頑張ると言っていたのですが、その願いはかないませんでした。

緩和ケア病棟に移ってから12日目でした。付き添った次男から、安らかな最後だったと聞きました。

今は悲しい気持ちでいっぱいですが、がんで苦しい毎日を耐えながらよくここまで頑張った、もう苦しまなくていいんだ、とも思っています。

今月の手賀沼通信は新田自然の追悼号とさせていただきます。

### 新田自然の死を悼む

新田慎二は昭和13年4月21日に、愛媛県伊予郡郡中町（現在は伊予市）で新田の次男として生まれました。私は12年1月生まれなので、歳は1歳違いですが、学年は2年違いでした。

昭和15年には妹が、17年には弟が生まれ4人兄弟となりました。

ところが19年には母親が肺結核でなくなりました。30歳でした。太平洋戦争の最中であり、父は荒物販売業をしていたので幼い子供4人を抱え大変だったと思います。

4人の兄弟はバラバラになり、慎二は実家の祖母に預けられました。4人が一緒に住むようになったのは父が再婚して新しい母が来てからでした。

慎二は松山南高校から1年の浪人を経て、早稲田大学商学部に入りました。

卒業後、損害保険会社の大正海上に入社、福岡支店に配属となりました。そこで生涯の伴侶となる女性と結婚しました。

そのあと、名古屋、広島、東京、仙台と転勤を

重ね、最後は東京に戻りました。

私は3つの会社を転職しましたが、慎二は定年まで大正海上に勤務しました。会社のほうが住友海上と合併して三井住友海上となっていました。

役員にこそなれませんでした。その一歩手前まで行ったようです。

会社生活についてはあまり話題にしたことがなく詳しいことは知りません。一つだけ記憶しているのは、事務管理部長時代に社歌の募集があり、部下を督励して自分も一緒に応募したら、自分の書いた作品が当選して社歌になった。記念にテレホンカードを作って配ったので賞金より高くついたらと自慢していたことです。

弟は色々な点で私より先を行っていました。

早稲田の学生時代、自動車部に入り運転免許を取りました。まだ学生はあまり免許を持っていない時代です。

結婚したのも、パパになったのも私より数年早くでした。

弟は好奇心と研究心が旺盛でした。また趣味が多く、山登り、街道歩き、ウォーキング、俳句、短歌、エッセイを書くこと、絵を描くこと、などをたしなんでいました。

趣味を生かした会やサークルなどに入り楽しんでいました。

街道歩きは東海道から始まって中山道、北国街道、奥の細道など全国の街道を歩きました。

俳句は生まれ故郷が愛媛の松山近くだったので特に愛着があったようです。

毎朝5時から朝の散歩を楽しんでいました。肝臓がんが見つかったから、朝の歩きが自分の生命線だと言って、最大の楽しみだったようです。

2004年には私と一緒に瀬戸内海にかかるしまなみ海道を尾道から今治まで歩いたこともあります。

慎二のがんと闘いは、1995年、57歳の時から始まりました。詳しいことは、下の「ガンを克服して」に述べられています。

この時は胃を6分の5取ったのですが、その後再発し全摘することになりました。それでも時々会って1杯やりました。胃がなくなっても、酒量は変わらないということを知りました。

その後妻のがんが見つかりました。C型肝炎から進行した肝臓がんでした。自分の胃がんが再発する前です。

その様子を2009年11月の手賀沼通信2月の手賀沼通信第131号に「妻の癌と付き合っ一年半」というタイトルで書いています。筆署名は慎二からの要請で、病院やドクターへの配慮のため「一読者」としました。慎二の涙ぐましい看病の奮闘ぶりが書かれています。

その後妻はなくなり、同年の11月号には「節子よ 安らかに眠れ」を載せることになりました。妻を亡くした痛みがひしひしと伝わってきました。慎二は71歳でした。

その後しばらくして同年代の女性と再婚しました。私にはその女性を紹介することはありませんでした。後ろめたさがあったのかもしれませんが。

5年前肝臓にがんが見つかりました。副作用の少ない抗がん剤などで治療をしていましたが、その後がんが広がり、入退院を繰り返すようになりました。

そして今年の1月6日に藤沢湘南台病院に入院、26日に緩和ケア病棟に移って、2月7日に亡くなりました。なお新田の4人兄弟は歳の若い順に亡くなことになりました。

慎二が手賀沼通信に原稿を初めて送ってくれたのは通信発行後2年近くたってからです。

それから積極的に送ってくれるようになりました。エッセイを書く勉強会に入っていて月に1回提出する必要があったようです。送ってくれたのはそのための原稿が多かったようです。

手賀沼通信第335号までに、他の方からのものを含めて185編の寄稿文をいただきました。そのうちの67編が慎二のもので、初期は新田慎二の名前で9編、その後新田自然のペンネーム

で57編、匿名で1編です。

私も寄稿文を載せると楽なので、新田自然の文章を積極的に載せさせてもらいました。

肝臓がんになっても文章の力は衰えず、ますます磨きがかかってきたように感じていました。

長い間ありがとう。

安らかに眠ってください。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

送ってもらったエッセイから、最初の1編と最後の1編を掲載します。

どちらもがんを取り上げています。

最初のエッセイは1999年12月の手賀沼通信第21号に載せたものです。私が手賀沼通信に載せる原稿はないかと問い合わせたところ送ってくれたものです。

## ガンを克服して

新田慎二

会社の健康診断で胃がんが見つかり、5/6を切除してもう4年になる。5年間はまだ経過観察中ということで、まだ開放されたわけではないが、ほとんど以前と変わらぬ生活するにいたっている。胃がほとんどなくなったため、食事は減ったが、山歩きは以前と変わらぬし、酒も同様に飲んでい。本人はそう思っても、会う人は「お体は大丈夫ですか？」などと言うので、抵抗感を感じているこの頃である。

4年もたったので、当時の記憶は薄くなってしまったが、良い機会であり当時のことを思い出しながら書いてみたい。

### 1 ガンの告知は立ち話

バリウムのあとの胃カメラの結果は異型細胞が見つかったということであった。医師の判断は「疑わしきは切りましょう」ということであり、言われるまま入院してしまった。病院は信濃町にある大学の付属病院であった。入院はしてもなんとなく手術はしたくなかった。そのころ同じ病院の先生で「ガン検診などはムダである」といってベストセラーになった本が病院の売店にあたりして、ガン細胞がないならば手術しないと言う気持ちが強くなっていたが、そのむなしい期待は若いドクターの一言で打ち消されてしまった。「ガン細胞が見つかりました。切りましょう」と廊下を歩きな

がらいう。そのペースにのって手術することになってしまった。

## 2 手術は簡単だったが

手術の前に家族が集まった。息子たちと一杯やりながら、自覚症状のない病気で手術を受けることにすっきりしないものを感じていた。

手術台に乗り、医師のいうままに数を数えているうち訳がわからなくなり、気がつけば集中治療室だった。病室にかえてその日から歩かされ、術後は順調そのものであり、2週間で退院ですかね、と言う段階で腸閉塞を起こしてしまった。下痢が続くので下痢止めの薬をもらったところ、その日からぱったりと便通がなくなり、腸はまったく動かなくなってしまった。それからが厳しかった。鼻からかなり大きなホースを突っ込まれ、1週間入れっぱなしとなり、薬剤の投入と排泄物の回収を行うこととなってしまった。あまりにもきついで再手術をお願いし、医師もこれでダメなら手術しましょうという途端、腸は開通した。うれしくて涙が出た。

## 3 ガンをどううけとめるか

ガンですと言われたとき「ああやっぱりそうか」と妙な納得感があったのも事実だ。母方の祖父が胃がんで亡くなっており、三大成人病のうち自分は何になるのだろうか？と考えたことがあったが、その他のデータもあわせて「ガンになる」という感覚を持っていた。生命保険も満期となり、ガン保険を躊躇せずに選んだのもこの感覚によるものだった。どうせ何かの病気になるのなら、チェックをしながらきめ撃ちするのも方法だと思う。

幸い80才までまだ20年近くある。意思と身体が同じレベルで動く時間が残されている。やりたかったことはとにかくやってみる、との価値観を大切にしていきたいと思っている。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

新田自然から届いた最後のエッセイです。絶筆となりました。どんな気持ちで書いたか知ることはできませんが、本人の覚悟が伝わってきます。2025年10月の手賀沼通信第331号に載せましたが、再度掲載させていただきます。

翌月の第332号にも、新田自然の「私の思い出の日々 - ひろこへのオマージュ」を載せてい

ますが、これは2024年に届いたもので最終ではありません。

本人の強い希望で332号に載せました。

## わが人生に悔いなし(わたしの懐かしい歌9)

新田自然

鏡に映るわが顔に グラスをあげて乾杯を  
たった一つの星をたよりに はるばる遠くへ  
来たもんだ  
長かろうと短かかろうと わが人生に悔いは  
ない

(作詞 なかにし礼)

この歌を石原裕次郎がレコーディングしたのは、1987年4月21日のことだ、そして亡くなったのが同年7月17日である、52歳、肝臓がん。その前年彼は体調不良の中をハワイに渡り、別荘で過ごした。高熱や全身倦怠が続く末期がんの中、終日海を眺めて過した。

「とにかくさ、あの叔父貴がソファに体を沈めたまま身動きせずに、いつまでもきりなく海を眺めてるんだよ、もう見ちゃいられなかったよ」(石原良純)。そんな中を2曲もレコーディングするのは、容易なことではなかったろう。彼は自分がガンであることを知らされてなかったようだが、並外れて繊細な男が食事の変化から見て、ただならぬ状態である事に気づかないはずはない、だれも言わない、彼も訊かない、裕次郎とはそういう男だった。

「そんな病状の中で誰がどう強いたのか、それとも弟の方で乗り気になったのか、ハワイ滞在中に弟は「北の旅人」と「わが人生に悔いなし」などという新曲をレコーディングしている。歌った当人がすぐに亡くなったからいうわけではないが、二つともなんとなく縁起の悪い歌で、特に後者は遺言というか自分のための他愛ない御詠歌みたいな代物で、まき子夫人が聞いて発売を延期したのはよくわかる」(石原慎太郎「弟」)。たぶん彼はプロダクションのため自分の死期を悟ってレコーディングしたのではないかと私は思っている。

私は流行歌手が功成って歌う「人生」という言葉に、ある種の違和感を持っていた。どこか教訓的で、私はここまでやってきたのだ、などと。成功者の立場で歌ったものが多い。周りが勝手に作

った歌を、よくもしれっと歌えるものだと感じていた。もっと気になるのは、さらに若い歌手に「人生」などとのたまわれると、「人生」とはそんな生易しいものじゃあねえよ、と言いたくもなったものだ。

裕次郎のこの歌も、歌詞がそれほど彼の個性を表現したものではない、あの「石狩挽歌」(北原ミレイ)や「風の盆恋歌」(石川さゆり)、を作詞した、あのなかにし礼のものとは思えない歌詞だ。たぶん裕次郎から依頼を受け作ったものだろう。彼は偶然の機会に裕次郎と会い、勧められて作詞家の道を歩み始めたのだ。もしこの作詞依頼が他に行っていたら「嫉妬で狂っただろう」とまで言った男だ、間もなく死んでゆく男に捧げる歌として、最大の賛辞を贈るとしたら「わが人生に悔いなし」と、このような詞にならざるを得なかったのだろう。

この曲を取り上げたのは、裕次郎を襲ったこの宿病は、私にも取り付いて、近くこれで逝くことになるが、彼とは5歳下で、同じ時代を過ごした者として、死を目前にして、「わが人生」を歌うことに納得したい。だが本当に「悔いなし」だったろうか。

「天は二物を与えず」という言葉がある。人はいいところと、良くないところをもって生まれてくるものだという格言だが、天は時々とてつもない美質を、一人の男に与えることがある。足が長く、恰好がよく、歌がうまく、それはスターの要素でもあるが、人が彼を愛してやまない性格まで与えている。「豪放」と「繊細」この矛盾する気質を持って生まれるなんてことは奇跡でしかない。「黒部の太陽」では既得権を振りかざす五社協定に立ちはだかり、これを崩すことになった。独立してからは「石原プロ」を見事にまとめ上げ、軍団が死後も二十数年間、作品を作り続ける力を与えた、彼の残した遺産、それは経済的なこともあるが、二十数年間も存続させるグループの団結力を、作り上げた力の大きさでもあった。

引き継ぐことになった渡哲也が言ったそうだが「もしもだよ、社長が体だけ回復してここを出てゆくことになったら、あの人の命と俺の命と引き換えで、この俺が預かる。いいかそれが俺の出来る恩返しだ。」と、それはもう信頼しきった男と男の関係でもあった。

若い慶応の医師が慎太郎にいったそうだ。「私は

今まで、周りがあんなに本気で懸命に看護するのを見たことはありません、普通の人間関係じゃ、だれもあそこまではしませんよ、あの人だからこそなのでしょね。私達医者まで感動させられ、引きずられて行きましたよ」

彼の信条は「人の悪口は絶対するな、人にしてあげたことはすぐ忘れろ、人にしてもらったことは絶対忘れるな」こうやって彼は石原軍団をまとめ上げていった。

人の人生だ、悔いが残ったのか残らなかったのか、それは本人に属するものだ。もしあるとすれば健康の問題だったろう。舌癌(43歳)。解離性大動脈瘤(46歳)、肝臓がん(50歳)、次々に襲ってくる病魔に彼は耐え抜いた。前にも書いたが「ガン」という病に「ひょっとしたら？」と思ったはずだ。全員がそのことだけは絶対口にしなかった。夫人もスタッフも慎太郎さえも、しかし一度だけ「これってガンだよな」と慎太郎に言ったそう。

天は二物を与えないとあったが、与えた人をもう一人指名するとしたら大谷翔平だろう。能力もルックスも、人をまとめ上げる明るい性格も、そして何よりの健康まで与えている。しかし、ここまで書いてきて、なんとなく気になったのが、あの「水谷問題」だ、私はあの沉着に異論を持っているわけではない、しかし、もし裕次郎だったら、どうアクションしただろうか、そんなことまで考えさせる裕次郎の人となりを感じている。

あの「わが人生に悔いなし」は決して評判のいい曲ではない。朝日新聞の追悼版でもあんな元気のない歌を歌わせるべきではなかったと、そんなふうにかかれていたが、間もなく消える者が力強く歌う歌でもあるまい。しみじみと彼は人生を振り返って歌ったのである。

桜の花の下で見る 夢にも似てる人生さ  
純で行こうぜ 愛で行こうぜ 生きてるかぎり  
は青春だ  
夢だろうと 現実(うつつ)だろうと わが  
人生に悔いはない。

私にも近いうちにご指名がかかるが、私の場合「わが人生に悔いはない」とは決して言えないものがいっぱいある。しかしこれだけは言える、悔いはいっぱいあったが、「わが人生は楽しかった」と